

森下嘉之著

『近代チエコ住宅社会史』

——新国家の形成と社会構想——

北海道大学出版会 二〇一三・二刊
A5 三〇四頁 七二〇〇円

本書は、住宅問題に着目し、二〇世紀前半のチエコで展開された住宅改革や住宅政策を通して、そこに示された社会構想を明らかにする。本書は二部から構成される。以下では、その構成に従いつつ内容を紹介する。

第一部は、ハプスブルク帝国末期からチェコスロヴァキア建国期、そして一九二〇年代における住宅改革を扱う。第一章で帝国末期チエコの都市化と住宅問題を概観したうえで、第二章では、新国家の国政レベルの住宅政策を、第三章では、プラハ市政と郊外住宅開発を事例に、この時期の住宅改革の理念を考察する。

住宅問題の深刻化に伴い、帝政末期には、多くの住宅組合や住宅改革協会が設立され、新国家の建国後も住宅改革を主導していった。この時期の住宅改革は、家族のみが居住する住宅を模範とし、その供給を通じて広範な階層に市民層の家族生活を訓育することを構想した。また、この住宅改革の動きは、自立した個人による持ち家所有を基盤とする一九世紀以来の市民的規範や、個人の財産所有に対する国家介入を限定的にとらえる自由主義的な性格を内包していた。

第二部は、一九三〇年代以降の新しい住宅改革の流れ、さらに第二次世界大戦後の住宅政策を追う。第四章で三〇年代の経済恐慌期における住宅政策の変容を概観し、第五章で、市民的な住宅改革とは異なる構想を提示した、前衛的知識人や機能主義建築家を取りあげ、その住宅改革の理念を考察する。第六章は、チエコのドイツ人社会における住宅改革の議論、ナチ占領下と第二次世界大戦期の住宅政策を、第七章は、終戦直後から一九四八年の社会主義政権成立までの「第三共和国」期を扱う。

三〇年代に台頭した前衛的建築家・知識人は、大規模集合住宅の建設を通じて、住宅を合理化し、家族の廃止までも構想した「最小住宅」によって、市民的規範に基づく家族住宅を乗り越えることを試みた。他方、ナチ占領期に国家統制が住民の社会生活に及ぶと、これを機に、住宅建設に国家が大規模に関与することになった。第三共和国期の国民戦線政府は、三〇年代に台頭した前衛的建築家を登用し、自由主義でもソ連型の社会主義でもない「チエコスロヴァキアの道」を模索した。そこでは、家族生活を「社会化」するのではなく、家族住宅の思想を踏襲した住宅が、集合住宅と計画経済の中で目指された。

チエコにおける住宅改革は、二〇年代までは、結社を通じた、市民的な規範に基づく改革が試みられ、改革家は、西欧市民層と共通の社会問題の認識を有していた。また、三〇年代以降の改革を主導した前衛的建築家も、国際的なモダニズム建築の潮流に参加していた。本書は、これらの指摘を通じ、「遅れた東側」「西側

に比して特殊な東欧社会」という固定観念を相対化する。また、前衛的建築家・知識人は、西欧やソ連をただ模倣するのではなく、戦間期チエコの社会状況を踏まえて改革構想を打ち出していた。これらとの連続性の中で提示された第三共和国期の住宅改革構想を、本書は、独自の社会の構築を模索したものとして、その積極的な意義を強調する。

(菅部 彰)